通常の学級における聴覚と視覚支援を用いた自作支援ツールによる行動支援の工夫



習志野市立東習志野小学校教諭　土井（どい）　淳（じゅん）

1　はじめに

文部科学省が行った調査では、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒が推定8.8％の割合で存在するという結果が示された。また、この支援を要する児童生徒に対して、授業時間内で個別の配慮・支援を行っているとされた割合は約54.9％で多くの学級で適切な支援が十分ではない状況が示唆された。この問題に対して私は、UD（ユニバーサルデザイン）の視点を取り入れた授業により、通常の学級における特別な教育的支援の必要性に対応しながら、学級全体への効果的な指導につなげることができると考える。これまでのUDの発想では、「視覚」が大切にされてきたが、気づきを与える「聴覚」の活用を取り入れることでより細やかな支援を実践したいと考えた。

2　自作支援ツール「アクションメーカー」

自作支援ツール「アクションメーカー」は、大型ディスプレイを通して、一単位時間（45分）の授業の流れやそのときにとるべき行動を「効果音」を伴う「画像」で示すことで、支援を要する児童に必要な指示や説明が通るように作成した。ホーム画面（図１）から各文字をタップすることで、効果音とともに詳しい説明や指示を画面に映す。画面を中央に分け、左側が授業の流れ、右側は説明や指示を伝えるコマンドとした。必要に応じて押すことで効果音が流れ、個別指導を含む全体への指示や支援をすることができる。



図１「アクションメーカー」ホーム画面

実践において効果的だった支援として、「見る」（図２）や「ノートの書き方」（図３）がある。「見る」は、授業中の切り替え時に効果音を合図に視覚による指示をすることで児童の聞き逃しが減り、自発的に活動することができた。「書く」は、板書に対してノートにどのように書けばよいのかを画像で示した。また、左下にタイマーを設置することで時間内に書こうと意識する児童も増えた。



図２「見る」



図３「ノートの書き方」

3　授業以外での自作支援ツールの活用



授業以外での活用は、「朝の準備」や「今月の歌」など、日常的によく使う指示については、常に大型ディスプレイに映している。





活用方法は、学級の実態によって様々なので必要に応じて内容を変えたり、児童と相談したりしながら日々改善している。

4　おわりに

勉強が得意な子も苦手な子も楽しく学習してほしいという願いから自作支援ツールを開発した。今後も困難を抱える児童を救うために学級全体に細やかな「特別ではない」支援教育に取り組み、心のバリアフリーの推進に力を尽くしていきたい。